



TITLE:

Ⅱ 退官にあたって

AUTHOR(S):

岩本, 光雄

---

CITATION:

岩本, 光雄. Ⅱ 退官にあたって. 霊長類研究所年報 1994, 24: 49-50

ISSUE DATE:

1994-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164608>

RIGHT:

## Ⅱ 退官にあたって

雑 感

岩 本 光 雄

私学の場合なら単に退職と言うのだろうか、官学だから退官と言う。仰々しく、妙な感じすらする。これもそれなりの伝統、慣習の余韻でもあるのだろう。まあ退官するにしろ、退職するにしろ、それに関連して語るとなれば、まずはこれまでのことを振り返るのが常道だろう。自分が身を置いていた機関なり、分野へのアドバイスといったものであれば、より恰好がいいのかもしれない。しかしそういう恰好のいいことは書けそうにない。もちろん、振り返ればあれこれといろいろなことが思い出されるが、余談だらけになりかねないし、一つだけ、Bノートというのにひっかけ、雑感を記させて頂く。

退官となると大変なのが、それまでの研究室からの引き上げである。荷造りをし、荷を運び出すことはもちろんだが、〈これはこの際、棄てるなりしようか、それとももう少し取っておこうか〉と迷うのが結構厄介である。たくさんの片づけ荷の中に自称、B5ノート、略してBノートというのがある。そう大量のものではないし、わけがあってこれは大体、家に持ち帰った。このノートはすでに大学生時代に始めていたもので、B5版の大学ノートの綴じ糸をはずし、綴じるための穴を予めあけておいたものに、読んだ論文の概要を書き写したり、自分自身の研究メモを記したりして、ある厚さになると一冊に綴じていた。何のことはない、ほかならぬメモカードを蓄積したようなものである。

このBノートのことをよく知っておられるのは、日本モンキーセンターから名古屋学院大学に移られた広瀬鎮さんぐらいのもので、Bノート、Bノートと言って、よく感心して下さったものである。いや、知っておられるのではなく、知っておられた、と言わなくてはならなかった。実はこの原稿の下書きをしながら、広瀬さんを思い出していた矢先、広瀬氏急逝との訃報が入ってきた。広瀬さんはいつもニコニコしておられる、ウィットのある好漢であった。鎮さん、Bノートをほめてくれる人がいなくなったら困るよ、と呼びかけたくなる思いである。心から御冥福をお祈りしたい。

大学生時代を含め、助手、講師時代の頃のBノートを見ると、今になって改めて驚かされる。殆どが鉛筆書きだが、細かい字でぎっしり書き写しをしたり、メモをしたりしている。そしてそういうものの内容の多くは、今なおかなりよく、この頭の中にも残っているのである。恐らく、若い頃のことなので、今より感心したり、感激したりして読んだものも多いし、記憶力もよかったことから、今も頭の中から消えにくいのだろう。それに、ほとんどコピーすることが考えられなかった時代なので、そうせざるをえなかったのが、何よりもよかったのだと思う。せせせと頭の回転と手の運動を同時進行させ、からだで覚えたという気がする。

時にカメラで文献を複写撮影し、フィルムを現像し、定着し、乾かし、その上で印画紙に引き伸ばすという面倒なこともしたが、何しろ教室に共用のカメラが1台しかないといった時代である。手間と経費もかかるし、それだけにかえて、読んではメモをする方に真剣になれたのである。コピー機が発達してからも、当初は結構大変だった。コピー用紙を1枚ずつ補給する式のコピー機だったし、コピーしたものの、半年、一年とたつうちに変色し、読めない部分がでてきたりしがちだった。

Bノートもあとの時期のものになると、雑誌からコピーした論文のたぐいが次第に多くなってきている。そして、ファイルに便利な文具が出てきて、綴じるのも楽になってきている。次第に、懐かしいとか、感心させられるというより、味気ないものになってきている。今に至るまで、コピーはなるべく少なめにし、読んでメモをとった方がと思いつつきているが、つついというより、時代の流れとともに、コピーを取ることが多くなざるをえなくなってきている。言うまでもなく、近年ますますである。情報量がふえる一方で、メモをとりながらじっくりと読むといった時間は取りにくくなってきた。そういう趨勢へ抵抗する気分もあって時おり、文献のコピーは第1ページのみを取り、それを綴じて保存するようにした。どうせ急には読めそうにもないし、といった気分が

あるのも否めないのだが。

ところで、この「退官にあたって」の原稿を頼まれた時、ふと「退官しての愉しみ」といった題でも書けるのではないかという気がした。研究室を引き払うために、本や学会誌や研究上の資料等運び出す面倒な作業をしながら、頭の中で、退官後の愉しみはそれなりにありそうだと、多少、悦になっていたのである。実際その気になれば、これまでより気ままに本を読んだり、旅行に出たりなどの愉しみもあるはずだが、それはそれ、永い間、研究生生活をしてきた身にとってはやはり、雑用に追われずに、やり残しの研究などができそうだというのが、退官しての愉しみの範疇の中にある。

よくよく考えると、研究室にいる方が研究には便利だし、のんきになり過ぎない点でもいいといった面があるのだろうが、長年にわたるさまざまな打合せや会議等のための資料、メモ類の山を前にしていると、理屈なしに、雑用に追われずに済むという愉しみを予感し、悦になってしまうところがある。どこか頭の片隅で、錯覚に過ぎないと思いつつも。

そういえばもう7年も前のことになるが、河合雅雄教授が「退官にあたって」書かれた雑感の中にも、雑用が多かったことに言及しておられるくだりがある。雑用ならぬ雑務と、より意味深長に表現しておられるのだが。―― 研究所創設初期海外調査関係以外の書類は、全て棄て去った。―― ただ一つ気がかりとして残ったのは、アリ塚のごとく営々と書類を積み重ねた会議という所業についてである。そのために、この20年間私はどれほ

どの時間を費したことだろうか」といった河合教授の話の文脈が、研究所の特色と関連して生ずる多量の雑務を軽減すべきとの助言へと進んでいるのである。

私の雑用に追われずに済むと安堵しているのとくらべると、まさに退官にあたって格調の高い言葉を、あれこれとどめておられる。くわしいことは直接、7年前の年報を見ていただくとして、とにかく雑務の軽減は私も賛成だし、多くの者はそうできればとは思っていることだろう。河合教授の退官から7年間、實際上、大勢はそう変わってはいない。委員会の数は多少減ったかに思うが、時の流れと共に新たに必要なものも出てくる始末で、事はそう簡単にはいかない。ともあれ、気をぬくと雑務に毒されかねない。日進月歩、うまく工夫してやっていって頂きたいと思う。

こうやって書いていると、やはり退官したところなのだという気が改めてしてくる。買って積んでおく、という慣用句のようなものがある。本を買うが、読まずに、あるいは読む暇がなくて積んで置くというわけである。出版物の多い近年は、見かけた時に買っておかないと、すぐ店頭からなくなるので、よけいそうなりがちである。実は本もそうだが、私の昔のBノートならぬ近年蓄積してきた文献のコピー類にも、そういうものが多い。それこそ退官後の愉しみに、そういう積んでおいたものを淡々と読んでみようと思っている。BノートならぬB-Diskを準備し、ワープロ書きのメモをそれに入れることになるかなとも考えながら。